—随　想—

東北の津波被災地にお遍路の道を作ろう

一般社団法人東北お遍路プロジェクト
理事長　新妻　香織

1ミリでもいい相馬市を後世に手渡したい

2011年３月11日14時46分。この時間を逆回ししたいときっと誰もが思っていることだろう。東日本大震災の大津波が10mの高さになってわが故郷福島県相馬市を襲った。地震当日は自宅にいて、すぐに海岸近くに住む両親を避難させていたが、実家は流れ、故郷は壊滅した。幸い我が家は海抜12mの高台にあったので津波の被害は免れたが、波は隣家まで到達し、道路を境にした寺の墓地にはスーパーや家屋が押し流されて来た。家が押しつぶされる音、電気系統の壊れた車から鳴り続くクラクション…。それはあまりにも現実味がなく、まるで映画の１シーンを見ているようだった。

近くの公民館は避難してきた人たちで溢れていたが、「千年に１度の大津波だってよ。冥土の土産だねぇ…」まだ私たちには冗談を言い合うくらいの余裕があった。しかし３月12日、14日、15日と次々爆破した原発事故で、私たちから完全に笑いが失せた。私たちは次世代に対し取り返しのつかないことをしてしまった！後悔と苦渋が胸を塞いだ。

決して絶望しない！この社会を選択した責任が私たち世代にはある。１ミリでもいい相馬市を次世代に手渡さなければ、申し訳が立たないと自分を奮い立たせた。

津波で壊滅した福島県相馬市尾浜地区

被災者支援の中から生まれた東北お遍路

私はもともと海外援助のNGOを主宰していることから、早速海外支援のスキルを使った支援に取り掛かった。幸いなことに、鎌倉の青年ら（「鎌倉組」と呼んでいた）が、週２回我が家にボランティアに入ってくれた。まず第１段階は「緊急支援」（炊き出し、物資配給、被災宅の泥掻き等）、そして第２段階は「生活支援」（仮設入居前の生活支援物資配布、いちごハウス解体作業）。第３段階は「在宅被災者支援」（戸別訪問で物資の手配と配給、ガレージマーケット、放射線測定と高圧洗浄器貸出等）。そして第４段階「まちづくり」と進めた。2011年８月にスタートさせた「松川浦の未来を語るゼミナール」（全８回）は、オピニオンリーダーに学び、自由闊達に思いや理想を語り合いながら、市民が自分たちの町を再建していくためのビジョンづくりを試みようというものだ。こんな時でもなければお目にかかれないような講師が毎月相馬市を訪れて、彼らの知恵と愛情を注いでくれた。

そしてこのゼミナールから２つのアクションを起こした。ひとつが「ふくしま市民発電」というコミュニティ発電会社と、そしてもうひとつが「東北お遍路プロジェクト」だった。

必ず福島に来なければならない仕掛けづくり

美しい景観と新鮮な魚介類が売りの相馬市の松川浦だったが、津波で景観は壊滅、おまけに原発事故で魚も取れないことに…。松川浦が再び観光地として復権するには、どうしてもここに来なければならない動機づけが必要だ…。そんなことを考えあぐねていた時に、思いついたのが「お遍路」だった。夫の故郷高知県を巡礼して歩くお遍路さんの姿をよく目にしていたせいかもしれない。お遍路なら、１カ所でも抜けていたら必ず人は来ざるをえない。東北の被災地青森県八戸市～福島県いわき市全体でこれをやれば、相馬市の交流人口も必ず増えると思った。

中には「被災地を観光地にするのか」という批判もないことはなかった。しかし日々被災地の中で暮らしている目線からいえば、「物見遊山でもいいからやって来てお金を落としてほしい」というのが正直な気持ちだ。被災地の人々が生業（なりわい）を維持するための観光誘客も立派な復興の手段になるはずと突き進んだ。

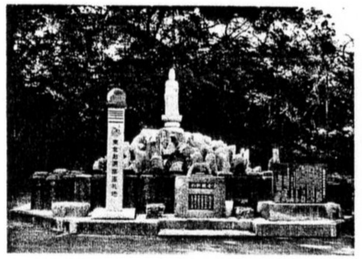
そうして、仙台市の異業種交流会「はなもく73会」の会員や自分が主宰するNPO「フー太郎の森基金」の会員らの賛同を得て、2011年９月に会を発足。間もなく、巡礼地の公募が始まった。知り合いのいなかった岩手県は、全被災自治体を巡って趣旨を説明して歩いた。お除で大槌町の市民団体は全戸アンケートをとって、候補地を選定してくれた。一方では、児童・教職員84名が死亡・行方不明になった石巻の大川小学校の父兄からは、「候補地に入れないでほしい」との手紙も頂いた。そして2012年末には暫定候補地約100カ所を選定することができ、翌年から候補地の検証作業を開始した。

公募で決まった東北お遍路のロゴマーク。仙台湾に女神さまの顔がやさしい。線の延長が東北の津波被災地になる

東北お遍路プロジェクトの思い

私たちは東北お遍路プロジェクト（こころのみち）の趣旨を次のように定めた。

「東北お遍路プロジェクトは、東日本大震災により被害を受けた福島県から青森県までの沿岸地域に慰霊・鎮魂のための巡礼地を選定し、千年先まで語り継ぎたい物語を見出して「こころのみちの物語」として発信し続けます。 そして民族や宗教を越えた多くの方々に巡礼地をたどって頂くことにより、東北の各被災地が連携して、千年後までも経済的・文化的に自立発展できる復興の一助となるよう、活動を続けてまいります。」



早々に巡礼地に決定された福島県新地町の龍昌寺には1号標柱が設置された

その具体的な活動の柱は次の４つだ。

1：東日本大震災による犠牲者の慰霊と巡礼（こころ）のみちづくり
2：津波の記憶を風化させることなく将来世代へと伝承
3：農漁業、観光業など地場産業の再生と創出
4：被災地域のネットワーク化

東北の被災自治体を巡る旅

さて、被災地を実際に訪ねて候補地を検証していく作業が始まった。私は１年半の間に担当した青森、岩手、福島の22自治体それぞれを、２～４回訪ねることになった。後世に継承する道を作っていくためには、地元の合意が欠かせないと考え、候補地の推薦者だけではなく、市民団体の方々や自治体の首長や担当者らに会って情報交換をしていった。

どこの自治体も復興に向けて動き始めていたが、まだまだ更地が広がるばかりだった。それでも戦略的にお遍路を利用したいと考える岩手県野田村の小野村長は、「町はずれの国道沿いでは通過されるだけなので、町中に巡礼地を選びたい」と語った。同じ岩手の田野畑村の石原村長は、「実は、震災の前に東北お遍路のような構想を練っていたことがあった。今はすっかり時間がなくなってしまったが、あなた方に会えてよかった！」とバトンを渡された。また除染が終わって間もない福島県の楢葉町や広野町では、「まずは住民の帰還が先」との声もあったが、「巡礼の人々が入ることによって、食堂や民宿を始めようという住人も現れるのではないだろうか…」と説得もした。

巡礼地決定とこれから

そうして持ち寄られた情報は2014年９月から有識者会議（創生委員会）を開催して、巡礼地を決定する作業に入っていった。選考委員は宮原育子氏（宮城大学）、結城登美男氏（宮城教育大学）、あんべ光俊氏（シンガー）、赤坂憲雄氏（福島県立博物館館長）の４名。100か所を越える候補地を一つひとつ審査していく作業は、３回にわたって行われ、ようやく先日、59カ所の巡礼地が選定された。発足から３年。感無量だった。

さて、これから東北お遍路はどう発展していくのだろう。２月４日の東北お遍路フォーラムで第１弾の59カ所の巡礼地を公式発表する予定だが、その後、第２弾、第３弾の巡礼地が追加され、おそらく10年くらいで最終的な形が整うのではないだろうか。

とはいえ、第１弾発表後には、地図を製作して配布しよう。きっと各種ツアーも始まるだろう。巡礼地の物語を紙芝居にする企画を広島市の市民団体から頂いているので、各地域の語り部の育成にも協力したい。それからすでに２カ所の巡礼地に東北お遍路の標柱が建っているが、モニュメントや標柱の受け入れにも対応したい。また「東北お遍路」の商標を使ったお土産品の開発を促したい。あるいは青森県～福島県を繋ぐウルトラマラソンのようなイベントが生まれるかもしれない。そうしてこの道を多くの人々が往来すれば、元々ひと懐っこい東北の人々だから、四国お遍路のような「お接待」の文化もやがて生まれてくることだろう。各地域がそれぞれ巡礼地を育てていってくれれば、１本の祈りの道ができ、辛いが前向きに生きた私たちの震災の記憶が1000年先にも語り継がれていくことだろう。

息の長い活動ゆえ、事業の一層の周知と盛り上がりは欠かせない。相馬市で開催した東北お遍路杯復興支援マラソンには全国から900名もエントリー

メンバーの村上美保子さんの紙芝居はツアー客の心に忘れられないものを刻む

復興にはまだまだ長い時間が必要だ。東北お遍路（こころのみち）が、被災地の「希望の種」のひとつとして育ってくれるようこれからも活動を続けていきたい。

●新妻香織（にいつま　かおり）プロフィール●
福島県富岡町生まれ。物心ついたころには相馬市に移住。日本女子大学国文学科卒。雑誌編集者を経て、30歳から5年間をアフリカで過ごす。1998年、アフリカの緑化と水源開発を行うNPO法人「フー太郎の森基金」を創設、代表。2000年、松川浦の環境保護団体「はぜっ子倶楽部」創設、代表。東日本大震災後は、「一般社団法人ふくしま市民発電」と「一般社団法人東北お遍路プロジェクト」を創設、ともに理事長。また相馬市市議会議員になり、津波と原発事故の被災地復興に取り組む。